

—最終アーティスト・内容詳細発表—

「アジア回廊 現代美術展」は、最終アーティストのラインナップを発表しました。

日中韓の最もベテラン世代のアーティストとして、草間彌生、蔡國強、チェ・ジョンファ。また、国際的に活躍する中国・韓国のアーティスト、そして日本からは、京都を拠点に国内外で活動するアーティストを多数紹介します。

■コンセプト

東アジア文化都市 2017 京都 コア期間事業アーティスト・ディレクター 建畠哲

＜アジア回廊＞という言葉には、東アジア文化都市のプロジェクトがさまざまな地域の文化芸術の豊かさに直接に触れ、感動を共にする場となり、またそのことが少しでも寛容で融和な社会の形成に寄与するものであってほしいという願いがこめられています。＜アジア回廊＞の回廊とは単に移動することだけを目的とするのではなく、むしろそこを巡り歩くこと自体を楽しむことができるような魅惑に満ちた場所なのです。世界文化遺産でもある主会場の二条城の建物や庭園がほぼ回廊式、回遊式に連なるように配置されており、観客もその広大な城域の各所に展示された作品群をループ状に巡り歩いて鑑賞するという順路のあり方が、期せずして「アジア回廊」の理念のメタファーをなしているといってもよいでしょう。そこにはお互いに文化風土を異にするアーティストたちの作品とのいくつかのワクワクするような出会いがあるに違いありません。

＜アジア回廊＞は美術館における展覧会などとは違って、京都ならではの時間の陰影を深く宿した場所で開催されるアートの祝祭です。その会場にはテーマパークのようなシミュラクルでの祝祭とは対極的に、日本の近世や近代の現実の歴史が息づいており、現地に向いて制作するアーティストたちの想像力を大いに触発することが期待されます。先端的、実験的な表

現と重厚な伝統の厚みとの共存は、京都で開催されるプロジェクトでなければありえない、不思議な雰囲気を醸し出して私たちを魅してくれるでしょう。

周知のように、今、世界では排他的で偏狭な思想が渦巻き、テロや紛争も絶えることがありません。しかしこうした時だからこそ文化芸術による相互理解とコミュニケーションの可能性を推し進めようとする東アジア文化都市の、そして＜アジア回廊＞の理念を掲げるこの意味は大きいといわなければなりません。多くの方々の来場を心待ちにしています。



西京人《第4章：アイラブ西京—西京国大統領の日常》2009

名称：東アジア文化都市 2017 京都「アジア回廊 現代美術展」

期間：2017 年 8 月 19 日（土）－ 10 月 15 日（日）※関係者向け内覧会は 8 月 18 日（金）

会場：二条城、京都芸術センター

時間：二条城会場 | 8:45-17:00（最終入城 16:00）なお二の丸御殿台所・東南隅櫓は 9:00-16:45

※休城日は要問合せ

京都芸術センター会場 | 10:00-20:00 ※会期中無休

料金：二条城会場 | 前売 400 円～（一部エリアは無料）※二条城の入城料は別途必要です ※詳細は P3 参照

京都芸術センター会場 | 無料 ※やなぎみわ公演など、有料イベントは別途イベントごとに参加料金が必要

主催：京都市、東アジア文化都市 2017 京都実行委員会

運営：東アジア文化都市 2017 京都現代美術部門運営委員会

助成：文化庁ほか

共同企画：京都芸術センター

■ 参加アーティスト (全 25 組) ● は 4 月 25 日に発表したアーティスト

氏名	英語表記	生年	出生地	拠点
西京人 (読み:サイキョウジン) [小沢剛、チェン・シャオション、ギムホンソック]	Xijing Men [Ozawa Tsuyoshi, Chen Shaoxiong and Gimhongsok]	e. 2007*	—	小沢=埼玉 ギムホンソック=ソウル チェン=北京
草間彌生 ●	Kusama Yayoi	1929	長野	東京
堀尾貞治 + 現場芸術集団「空気」	Horio Sadaharu + On Site Art Squad KUKI	1939	兵庫	兵庫
今村源 ●	Imamura Hajime	1957	大阪	京都
中原浩大 ●	Nakahara Kodai	1961	岡山	京都
三嶋りつ恵 ●	Mishima Ritsue	1962	京都	京都、ヴェネツィア
やなぎみわ	Yanagi Miwa	—	兵庫	京都
伊藤存 ●	Ito Zon	1971	大阪	京都
宮永愛子 ●	Miyanaga Aiko	1974	京都	神奈川
花岡伸宏	Hanaoka Nobuhiro	1980	広島	京都
久門剛史	Hisakado Tsuyoshi	1981	京都	京都
谷澤紗和子	Tanizawa Sawako	1982	大阪	京都
ヒスロム [加藤 至、星野文紀、吉田 祐]	hyslom [Kato Itaru, Hoshino Fuminori and Yoshida Yuu]	e. 2009*	—	京都
中村裕太 + 谷本 研	Nakamura Yuta + Tanimoto Ken	e. 2014*	—	中村=京都 谷本=滋賀
キムスージャ	Kimsooja	1957	大邱	NY、パリ、ソウル
チェ・ジョンファ ●	Choi Jeonghwa	1961	ソウル	ソウル
オ・インファン	Oh Inhwan	1965	ソウル	ソウル
ハム・キョンア ●	Ham Kyungah	1966	ソウル	ソウル
ミックスライス [チョ・ジウン、ヤン・チョルモ]	mixrice [Cho Jieun and Yang Chulmo]	e. 2002*	—	ソウル
ヒョンギョン ●	Hyon Gyon	1979	ソウル	NY
ツァイ・グオチャン (蔡國強) ●	Cai Guo-Qiang	1957	福建	NY
ヤン・フードン (楊福東)	Yang Fudong	1971	北京	上海
ルー・ヤン (陸揚)	Lu Yang	1984	上海	上海
ヘ・シャンユ (何翔宇)	He Xiangyu	1986	丹東	北京、ベルリン
タオ・ファイ (陶輝) ●	Tao Hui	1987	雲陽	北京

メンバー名 = []

* グループは結成年

■ 有料チケット料金

二条城の入城チケット（通常 600 円）で通常エリア展示をご覧ください。
また、有料エリア展示（通常非公開の「台所」「東南隅櫓」）をご覧ください 위해서는、別途有料チケット（前売 400 円、当日 600 円）が必要です。
有料エリア展示を御覧になる場合は、二条城の入城チケットをまとめて購入できる、セットチケット（前売 1,000 円、当日 1,200 円）が便利です。

有料エリア展示 単独チケット

前売 400 円、当日 600 円

セットチケット（二条城+有料エリア展示）

前売 1,000 円、当日 1,200 円

【注意事項】

※表示料金は消費税込 ※紛失、盗難などによる本チケットの払い戻し、再発行はできません。
※荒天や災害などにより入場を制限する場合があります。その際の払い戻しはいたしません。
※本券は 1 枚につき、1 名様 1 回限り有効です
※二条城の外に出ると再入城はできません。本チケットで「台所」と「東南隅櫓」は当日中何度でも再入場が可能です。

	【参考】二条城の入城料
一般	600 円 ※市内在住の 70 歳以上の方は無料（要確認書類）
大学生	600 円 ※キャンパス文化パートナーズ会員は 100 円（要学生証）
高校生	350 円
中学生	350 円 ※京都市内の小中学生は無料
小学生	200 円 ※京都市内の小中学生は無料
未就学児	無料
団体	30 名以上の団体は一般の方のみ入場料が ¥500
その他割引	市営地下鉄 1 day フリーチケット（地下鉄 1 日乗車券）を提示すると ¥100 の割引（当日の入城料（一般）のみ）
備考	身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳 療育手帳、被爆者健康手帳、戦傷病者手帳等をお持ちの方は、本人と介護者 1 名が無料

発売日

2017 年 5 月 17 日（水） 予定

発売期間：前売券 2017 年 8 月 18 日まで。当日券は 2017 年 8 月 19 日～10 月 15 日

販売場所

京都芸術センター（窓口）ほか、市内中心に数カ所を予定しています。

プレスリリースに掲載の画像は広報媒体にてお使いいただけます。ご希望の方は下記までお問い合わせください。

【広報 お問合せ】 東アジア文化都市 2017 京都現代美術部門運営委員会（京都芸術センター内） 広報担当：西谷

Tel. 075-222-2733 E-mail. info@asiacorridor.org

■ アーティスティック・ディレクター

建畠 哲 Tatehata Akira (美術評論家・詩人)

1947年京都市生まれ、1972年早稲田大学文学部仏文学科卒業、2005年～11年国立国際美術館館長、2011年～15年京都市立芸術大学学長、2011年～埼玉県立近代美術館館長、2016年～京都芸術センター館長、多摩美術大学学長。専門は近現代美術。「ヴェネチア・ビエンナーレ」日本館コミッショナー（1990、93年）、「横浜トリエンナーレ 2001」アーティスティック・ディレクター、「あいちトリエンナーレ 2010」芸術監督など、多くの国際美術展を組織し、アジアの近現代美術の企画にも多数参画。おもな著書に、詩集『余白のランナー』（1991年）第2回歴程新鋭賞受賞、『問いなき回答 オブジェと彫刻』（1998年）、『未完の過去 絵画とモダニズム』（2000年）、詩集『零度の犬』（2004年）第35回高見順賞受賞、エッセイ集『ダブリンの緑』（2005年）、詩集『死語のレッスン』（2013年）。第21回萩原朔太郎賞受賞。

■ キュラトリアルチーム

キュレーター／アシスタントディレクター | 山本麻友美 Yamamoto Mayumi (京都芸術センター チーフプログラムディレクター)

奈良県生まれ。2000年の京都芸術センター開館時より、アート・コーディネーター。その後、シニア・アートコーディネーター、プログラム・ディレクターを経て、2016年よりチーフプログラム・ディレクター。アーティスト・イン・レジデンス事業、展覧会事業等の統括を行う。

キュレーター | 徳山拓一 Tokuyama Hirokazu (森美術館アソシエイト・キュレーター)

静岡県生まれ。2012年より京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA で学芸員として勤め、2016年4月より森美術館に勤務。森美術館では2017年7月5日から始まる「SUNSHOWER: 東南アジアの現代美術展 1980年代から現在まで」を担当。京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA での主な展覧会企画として、2016年ガイド・ヴァン・デル・ウェルヴェ展「無為の境地」、奥村雄樹展「な」、2014年アピチャッポン・ウィーラセータクン展「PHOTOPHOBIA」、ミヤギフトシ 展「American Boyfriend: Bodies of Water」、2013年「京芸 transmit program #04 KYOTO STUDIO」等がある。平成27年度京都市芸術文化特別奨励者。東京都在住。

■ 二条城について

江戸時代*1に徳川幕府によって造営され、その後京都府庁や皇室の離宮として使用された歴史をもつ。東西約500メートル、南北約400メートルの堀に囲まれた城内は国の史跡に指定されているほか、1994年（平成6年）には古都京都の文化財として世界遺産条約に基づく世界文化遺産に登録されている。

現存する二の丸御殿（国宝）は6棟からなる武家風書院造で、彫刻や飾金具を通して桃山美術の粋を感じることができる。また、内部には3600面にも及ぶ障壁画が遺され、その中でも1016面は国の重要文化財である。二の丸御殿から臨むことができる二の丸庭園（特別名勝）は小堀遠州作庭。本丸御殿（重要文化財）は当時の御殿が1788年（天明8年）に天明の大火によって焼失してしまったため、1893年（明治26年）に京都御苑内にあった旧桂宮御殿を移築したもの。徳川家康の將軍宣下に伴う賀儀と、徳川慶喜による大政奉還*2が二条城で行われたことから江戸幕府の始まりと終焉の場であると言われる。

*1 1603年（慶長8）徳川家康によって築かれ、1626年（寛永3）に3代將軍家光の代に増築を行い現在の規模になる。

*2 2017年は大政奉還が行われた慶応3年（1867年）から150年にあたる。



■ 京都芸術センターについて

京都芸術センターは、芸術家その他芸術に関する活動を行う者が連携し、京都市における芸術の総合的な振興を目指して2000年4月に開設された芸術創造拠点。芸術に関する活動を支援し、芸術に関する情報を広く発信するとともに、芸術を通じた市民と芸術家等の交流を図ることを目的とし、多様な事業を展開している。

現代美術だけではなく、伝統芸能、音楽、演劇、ダンス、工芸など、ジャンルにとらわれない幅広い活動を支援するとともに、新しい創作にも積極的に取り組み、国際交流や情報発信にも取り組む。

建物は、近代建築の美を誇る元明倫小学校をリノベーションし活用、京都の中心部である祇園祭の鉾町に位置している。



【東アジア文化都市とは】

「東アジア文化都市」とは、日本・中国・韓国の各国政府から選定された都市が、1年間を通じて文化芸術による多彩なイベントや交流を行うことにより、文化の力で東アジアの相互理解や連帯感の形成を促進するとともに、開催都市の更なる発展を目指す事業です。

京都市は中国・長沙市、韓国・大邱広域市とともに2017年の開催都市に選ばれ、伝統的な文化芸術、現代美術、舞台芸術、音楽、マンガ・アニメなど、幅広いジャンルの多彩なイベントを開催します。

また、長沙市、大邱広域市との文化交流を軸に東アジアの都市間交流を促進し、文化の力で日中韓の友好を深め、新たな活力を生み出していきます。

■ 西京人（サイキョウジン） Xijing Men

2007 年に結成。小沢剛、チェン・シャオション、ギムホンソックの日本・中国・韓国を拠点とする 3 人のアーティストによるコラボレーション・チームであり、プロジェクトベースで作品を制作する。西京というアジアのどこかにある都市国家を設定し、架空の都市の物語を伝えている。近年の主な個展に「西京は西京ではない、ゆえに西京は西京である。」（金沢 21 世紀美術館、2016 年）、「World of Xijing」（国立近現代美術館、ソウル、2015 年）、グループ展では光州ビエンナーレ（2012 年）、メディア・シティ・ソウル 2010、リヨン・ビエンナーレ（2009 年）などに参加。

【メンバー】

小沢剛 Ozawa Tsuyoshi

1965 年東京生まれ、埼玉在住。主な個展に、「小沢剛展 帰って来たペインター F」（資生堂ギャラリー、東京、2015 年）、「透明ランナーは走りつづける」（広島市現代美術館、2009 年）、「小沢剛：同時に答える Yes と No !」（森美術館、東京、2004 年）など。近年参加したグループ展に、さいたまトリエンナーレ 2016、「あそびのつくりかた」（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、香川、2014 年）、混浴温泉世界 2012（大分）など。

チェン・シャオション（陳劭雄／Chen Shaoxiong）

1962 年汕頭（中国）生まれ、2016 年死去。主な個展に「チェン・シャオション：Prepared」（Power Station of Art、上海、2016 年）、「チェン・シャオション：インク・ヒストリー・メディア」（シアトル美術館、2014 年）など。近年参加したグループ展に「The Civil Power」（民生現代美術館、北京、2015 年）、「Making Histories」（カンザスシティ・アート・インスティテュート、2015 年）、「INK ART: Past as Present in Contemporary China」（メトロポリタン美術館、ニューヨーク、2013 年）など。

ギムホンソック Gimhongsok

1964 年ソウル生まれ、在住。主な個展に「Good Labor Bad Art」（サムスン美術館、ソウル、2013 年）、「Ordinary Strangers」（アート・ソング・センター、ソウル、2011 年）など。近年参加したグループ展に、ヨコハマトリエンナーレ 2014、「Your Bright Future」（口サンゼルスカウンティ美術館、2009 年）、「Brave New Worlds」（ウォーカー・アート・センター、ミネソタ、2007 年）、ヴェネチア・ビエンナーレ（2003 年、2005 年）など。



《第 3 章：ようこそ西京に一西京オリンピック》（2008）



左右ともに 《第 4 章：アイラブ西京ー西京国大統領の日常》（2009）

■ 草間彌生 Kusama Yayoi

1929 年松本生まれ、東京在住。10 歳の頃より水玉と網模様をモチーフに絵を描き始め、水彩、パステル、油彩などを使った幻想的な絵画を制作。京都市立美術工芸学校（現京都市立芸術大学）で日本画を学んだのち、故郷の松本で創作活動を開始するが 1957 年に渡米。ネット・ペインティングのシリーズなどによって国際的な前衛芸術家としての地位を築き上げた。1973 年に活動拠点を東京に移し、現在に至るまで精力的に制作活動を行っている。ヴェネツィア・ビエンナーレ（1993 年）で日本代表として日本館初の個展を開催。2011 年にテート・モダンを皮切りに開催された回顧的大規模個展は、ポンピドゥ・センターなどヨーロッパ、中南米、アジア、北米の主要な美術館に巡回し、世界各地で大きな話題となった。

目下、最大級の回顧展が国立新美術館で開催されており、記録的な数の観客を動員中である。世界で最も影響力がある 100 人（『タイム』誌、2016 年）に選出される。文化勲章受章（2016 年）、文化功労者（2009 年）、世界文化賞（2006 年）、朝日賞（2001 年）、等受賞。



《南瓜》フォーエバー現代美術館蔵
「草間彌生 わが永遠の魂」展 国立新美術館（2017）展示風景
© YAYOI KUSAMA



© YAYOI KUSAMA

■ 堀尾貞治+現代芸術集団「空気」 Horio Sadaharu + On-Site Art Squad KUKI

堀尾貞治は、1939年兵庫県生まれ、在住。1966年から戦後の前衛美術運動をリードした具体美術協会に参加。1998年の定年退職までサラリーマンとして働きながら、旺盛な作家活動を展開する。1985年頃から「あたりまえのこと」をコンセプトに作品制作を始める。堀尾貞治の活動に共鳴し、そのサポートに当たる現場芸術集団「空気」は、主に神戸・大阪の現代美術作家・愛好家で構成される緩やかで不定形なグループ。彼らと共同で、水都大阪2009、横浜トリエンナーレ2005などで数々のパフォーマンスを実施。また、「A Feverish Era in Japanese Art」(BOZAR CENTRE FOR FINE ARTS、ブリュッセル、2016年)、「Gutai: Splendid Playground」(グッゲンハイム美術館、ニューヨーク、2013年)の開催にあたって、堀尾はオープニングイベントに招けられ、パフォーマンスを披露。近年は堀尾の海外プロジェクトにも「空気」のメンバー数名が同行することが多い。



Photo: Aki Yanaka



《空気美術館 in 兵庫運河》(2003) Photo : Geneviève Haraguchi



《あたりまえのこと (ルック・傘デレー)》、横浜トリエンナーレ (2005)
Photo : Geneviève Haraguchi



《あたりまえのこと (点から四角)》(芦屋市立美術館、2007)
Photo : Geneviève Haraguchi

■ 今村源 Imamura Hajime

1957 年大阪生まれ、京都在住。1983 年京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。日々の生活の中にあるものをモチーフとしたユーモラスな作品を通して、見る者へ日常と表裏一体にある別の世界を想わせる。いずれにも寄らない作家独自の哲学的な作風は、他のアーティストからも支持を得ている。近年行われた主な個展に「わた死としてのキノコ・今村源」（静岡市美術館、2013 年）、「連菌術」（伊丹市立美術館、兵庫、2006 年）、主なグループ展に「第 28 回京都美術文化賞受賞記念展」（京都文化博物館、2016 年）、「BOOK ART 2013-14 Japan-Korea 本の分裂-棚と机-」（de sign de>、大阪、2014 年）などがある。



「Shizubi Project 3 わた死としてのキノコ 今村源」会場風景（2013）
Photo: 表恒匡



「世界と孤独 vol.5 今村源展ーわた死としてのキノコー」会場風景（2013）
Photo: 今村源



《あけるヒト》（2015） Photo: 今村源



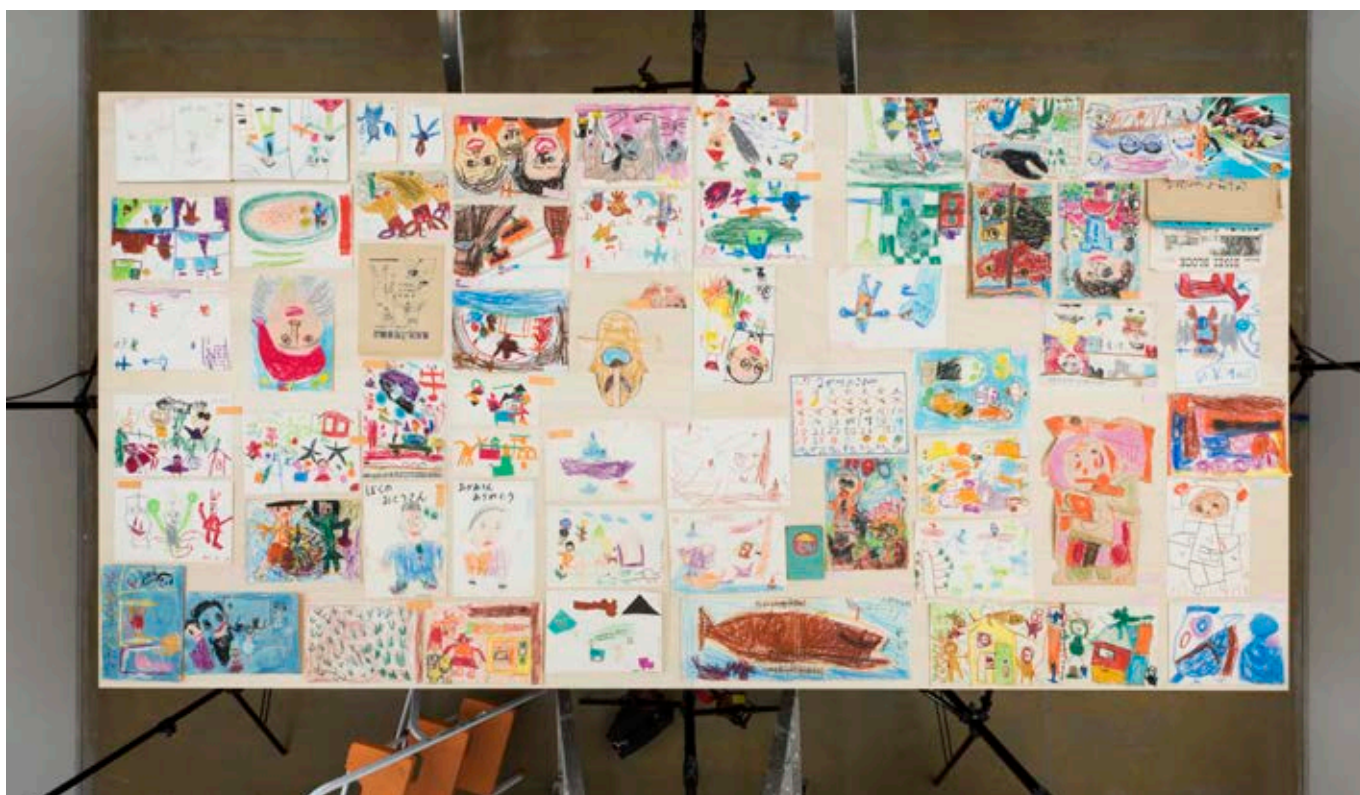
「Shizubi Project 3 わた死としてのキノコ 今村源」会場風景（2013）
Photo: 表恒匡

■ 中原浩大 Nakahara Kodai

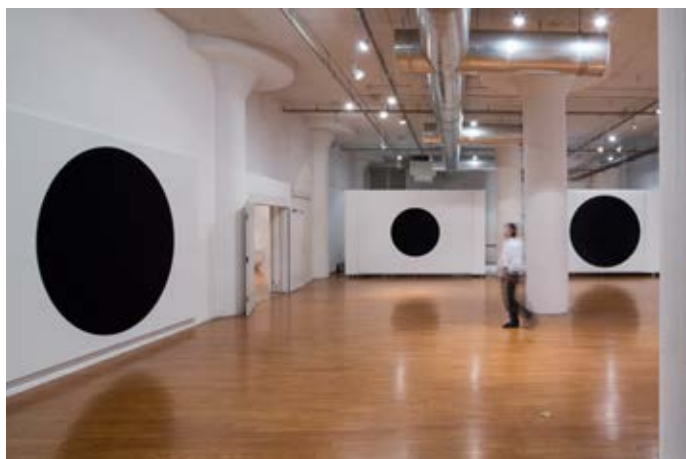
1961 年倉敷生まれ、京都在住。1986 年京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。1980 年代から様々な種類の素材やメディアを駆使しながら制作された作品は次世代の表現として活動当初から高い評価を受けた。90 年代以降は、レゴ・ブロックやプラモデル、フィギュアなどの既製品を用いて、美術作家としての自身のあり方を問い直そうとする作品を発表、美術界に大きなセンセーションを巻き起こした。95 年以降は作家活動から距離を置いた時期を経て、美術の範疇のみにとどまらない幅広い活動を展開している。近年に行われた主な個展に「中原浩大 自己模倣」（岡山県立美術館、2013 年）、「中原浩大 Drawings 1986-2012 コーちゃんは、ゴギガ？」（伊丹市立美術館、兵庫、2012 年）、主なグループ展に釜山ビエンナーレ（2016 年）、「コレクション展 2015-I：記録（ドキュメント）」というカタチ」（広島市現代美術館、2015 年）など。



Photo : 福永一夫



個展「Educational」展示風景（1963 頃 -1977 頃、2017）photo: 福永一夫 Courtesy of the artist



《ConS:KConWS_6p》インスタレーション（部分）（2014）
アクリル絵具、カンヴァス（6 点組）
Photo: 中川達彦 Courtesy: 横浜美術館



《果物グラフ（秋庭）》インスタレーション（部分）（2011）
photo: 中原浩大 Courtesy of the artist

■ 三嶋りつ恵 Mishima Ritsue

1962 年京都生まれ。1996 年よりムラーノ島のガラス工房に通い始め、職人とのコラボレーションにより作品を生み出す。千年の伝統技術と三嶋の自由な感性の融合から生まれた無色透明なガラスは、光を透すことで新たな魅力を放っている。作品制作だけにとどまらず、空間にガラス作品を置くインスタレーションによって「次に見えてくるもの」を見据えた表現を続けているのも三嶋の特徴である。主な個展に、「凍った庭／炎の果実」（ボイマンス・ヴァン・ペーニンゲン美術館、オランダ、2010 年）、「あるべきようわ」（資生堂ギャラリー、東京、2011 年）、「In Grimani」第 55 回ヴェネツィア・ビエンナーレ関連企画（国立パラッツォ・グリマーニ美術館、ヴェネツィア、2013 年）ほか。



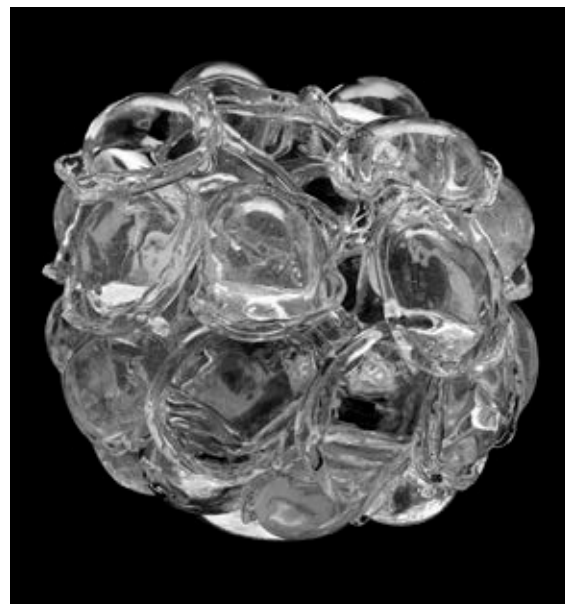
Photo: Tadayuki Minamoto



「In Grimani. Ritsue Mishima Glass Works」
第 55 回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展関連企画（2013）
国立パラッツォ・グリマーニ美術館展示風景
Photo: Andrea Martiradonna



《CRISTALLO》（2017） Photo: Francesco Barasciutti



《MEDUSA》（2016） Photo: Francesco Barasciutti

■ やなぎみわ Yanagi Miwa

神戸生まれ、京都在住。1991 年京都市立大学大学院美術研究科修了。1990 年代後半より写真作品を発表。主な個展にヴェネツィア・ビエンナーレ（日本館、2009 年）、グループ展では PARASOPHIA: 京都国際芸術祭 2015、シドニー・ビエンナーレ（2002 年）に参加。2011 年から本格的に演劇活動を開始し、『1924 海戦』（2011 年）、『ゼロ・アワー 東京ローズ最後のテーブル』（2013 年）を演出し、2015 年に北米 5 都市を巡回。2014 年にステージトレーラーを台湾で製作しヨコハマトリエンナーレ 2014 で発表。2016 年に野外演劇『日輪の翼（原作：中上健次）』を上演した。京都造形芸術大学教授。2015 年には文化庁「東アジア文化交流使」を務める。



Photo: Shen Chao-Liang



『日輪の翼』（2016）Photo：表恒匡



左右ともに『日輪の翼』（2016） Photo：Kenryou GU



■ 伊藤存 Ito Zon

1971 年大阪生まれ、京都在住。1996 年京都市立芸術大学美術学部卒業。刺繍の作品をはじめとして、アニメーション、粘土絵、小さな立体などを制作。近年の主な個展に「三つの個展：伊藤存 × 今村源 × 須田悦弘」（国立国際美術館、大阪、2006 年）、「きんじょのはて」（ワタリウム美術館、東京、2003 年）、グループ展に「Now Japan Exhibition with 37 contemporary Japanese artists」（Kunsthal KAdE、オランダ、2013 年）、「プライマリー・フィールドⅡ：絵画の現在 — 七つの〈場〉との対話」（神奈川県立近代美術館葉山館、2010 年）、「Louisa Bufardecì & Zon Ito」（シドニー現代美術館、2009 年）など多数。2001 年咲くやこの花賞美術部門受賞。



Photo: Kazuhiro Fujita ©Nikkei Kairo



《抽象的なあつまり 具体的な点》(2016)
Photo: 市川靖史 Courtesy: Taka Ishii Gallery



《目の前と後ろがはてしない》(2016)
Photo: 市川靖史 Courtesy: Taka Ishii Gallery



個展「ふしぎなおどり」展示風景 (2016) タカ・イシイギャラリー Photo: 高橋健治 Courtesy: Taka Ishii Gallery

■ 宮永愛子 Miyanaga Aiko

1974 年京都市生まれ。1999 年京都造形芸術大学芸術学部美術科彫刻コース卒業後、2008 年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。2007 年文化庁新進芸術家海外研修制度によりエジンバラに滞在。ナフタリンや塩、陶器の貫入音や葉脈を使ったインスタレーションなど、気配の痕跡を用いて時を視覚化する作品で注目を集める。2013 年「日産アートアワード」初代グランプリ受賞。主な展覧会に「日産アートアワード 2013」(BankART Studio NYK、神奈川、2013 年)、「house」(ミヅマアートギャラリー、東京、2013 年)、「宮永愛子：なかそら一空中空一」(国立国際美術館、大阪、2012 年)、「景色のはじまり一金木犀一」(ミヅマアートギャラリー、東京、2011 年)、「あいちトリエンナーレ」(愛知芸術文化センター、2010 年)、「漕法」(京都芸術センター、2008 年)など。2013 年度京都市芸術新人賞受賞。



Photo: MATSUKAGE
© MIYANAGA Aiko
Courtesy Mizuma Art Gallery



《suitcase -key-》(2013) Photo: 木奥恵三
© MIYANAGA Aiko Courtesy Mizuma Art Gallery



《Quartet-clock-》(2011) Photo: 宮島径 © MIYANAGA Aiko
Courtesy Mizuma Art Gallery



《なかそら —透き間—》(2012) Photo: 豊永政史
© MIYANAGA Aiko Courtesy Mizuma Art Gallery

■ 花岡伸宏 Hanaoka Nobuhiro

1980 年広島生まれ。京都在住。2006 年に京都精華大学大学院芸術研究科博士前期課程修了。洗面台やマンガ本、衣服など、身の回りの物と高い技術力による人物などの木彫を脈略なく切断し組み合わせることで、新たな意味を生成しようとするポエティックな表現を特徴とする。近年の主なグループ展に「still moving @ KCUA」(京都市立芸術大学ギャラリー@ KCUA、2015 年)、「ユーモアと飛躍 そこに触れる」(岡崎市美術博物館、愛知、2013 年)などがある。VOCA 2016 ノミネートアーティスト、「第 12 回岡本太郎現代芸術賞展」特別賞 (2009 年)、「2006 JEANS FACTORY ART AWARD」優秀賞。



《statue of clothes (red)》(2015) 撮影：草木貴照



《無題 (木棒、折れ、頭部、雑誌)》(2016)



《無題 (頭部、手、木、流し台、服、雑誌)》(2016) 撮影：高野友美

■ 久門剛史 Hisakado Tsuyoshi

1981 年京都生まれ、在住。2007 年京都市立芸術大学大学院 美術研究科彫刻専攻修了。様々な現象や歴史を採取し、音や光、立体を用いて個々の記憶や物語と再会させる劇場的空間を創出する。近年の主な展覧会に、個展「MoCA Pavilion Special Project Tsuyoshi Hisakado」（上海当代艺术馆、2016 年）、あいちトリエンナーレ 2016 がある。2002 年よりアーティストグループ SHINCHIKA のサウンド担当として活動。2016 年には世界各国で上演されたチェルフィッチュ『部屋に流れる時間の旅』の舞台美術と音を担当するなど活躍の場を広げている。主な賞歴に「日産アートアワード 2015」ファイナリスト／オーディエンス賞、VOCA 賞（2016 年）、平成 28 年度京都市新人賞。平成 28 年度文化庁「東アジア文化交流使」、平成 27 年度京都市芸術文化特別奨励者。



《PAUSE》(2016) Photo：怡土鉄夫



《PAUSE》(2016) Photo：怡土鉄夫



《FUZZ》(2015)

■ 谷澤紗和子 Tanizawa Sawako

1982 年大阪生まれ。京都在住。2007 年京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。原始宗教や土着的な寓話などを参照し、切り紙、陶などの手法によって、巨大なインスタレーションや小さな人形などを制作する。懐かしいようでどこかしら恐ろしい谷澤のオブジェは、様々な感情を喚起させることで観る者を作品世界に引き込む。主な個展に「ミンハメグリ」（おおさかカンヴァスプロジェクト、大阪府立中之島図書館、2012 年）、主なグループ展に「高松コンテンポラリーアートアニュアル vol.5 見えてる景色／見えない景色」（高松市美術館、2016 年）、「亡霊― 捉えられない何か」（瑞雲庵、京都、2016 年）、「化け物展」（青森県立美術館、2015 年）、六甲ミーツ・アート 芸術散歩 2014 などがある。



Photo：賀集東悟



《おやまさま》(2016) Photo：柿崎真子



《無名》(2014) Photo：賀集東悟



《ほら》(2016) Photo：木奥恵三

■ ヒスロム hyslom

加藤至、星野文紀、吉田祐からなるアーティストグループ。2009 年より活動をはじめ。造成地の探険で得た人やモノとの遭遇体験や違和感を表現の根幹に置き、身体を用いて土地を体験的に知るための遊び「フィールドプレイ」を各地で実践し映像や写真、パフォーマンス作品としてあわす。またその記憶を彫刻作品や舞台、映画へと展開させている。2015 年から任秀夫氏と共に「任・ヒスロム鳩舎」として日本鳩レース協会に入会。レース鳩に関するワークショップや展示などもおこなっている。これまで参加した主な展覧会に「アッセンブリッジ・ナゴヤ 2016」(旧・名古屋税関寮、2016 年)、「新シク開 イタ地」(神戸アートビレッジセンター、2016 年)、「美整物—<例えば>を巡る」(日米ニュー・コネクション・プロジェクト、京都芸術センター、2014 年) など。



Photo: 内堀義之



《美整物 -<例えば>を巡る》(2014) ビデオ Courtesy of artist



《美整物 -<例えば>を巡る》(2014) Photo: Kim Song Gi Courtesy of artist



《美整物 -<例えば>を巡る》(2014) Photo: Kim Song Gi Courtesy of artist

■ 中村裕太+谷本研 Nakamura Yuta + Tanimoto Ken

2014 年からゆるやかなユニットとしての活動を開始。個別に活動をする谷本研（1973 年神戸生まれ、滋賀在住。1998 年京都市立芸術大学大学院美術研究科造形構想修了）と中村裕太（1983 年東京生まれ、京都在住。2011 年京都精華大学芸術研究科博士後期課程修了）が、表現することも「観光」ととらえながらプロジェクトを行う。過去の展覧会に、街中に点在する路傍のホコラの生態系やそこに使用されるタイルに着目し、ツーリズムの視点で考察した「タイルとホコラとツーリズム」(Gallery PARC、京都、2014 年)、タイルとホコラにまつわる資料・文献を集め、収蔵庫「ホコラテーク」を出展させた「season2《こちら地蔵本準備室》」(Gallery PARC、京都、2015 年)、『北白川こども風土記』(北白川小学校編、1959 年)に導かれ、ポニーとともに白川街道を歩き、道中に会う石仏に花を手向けた「season3《白川道中膝栗毛》」(Gallery PARC、京都、2016 年)がある。



Photo：麥生田 兵吾



《タイルとホコラとツーリズム》(2014) Photo：表 恒匡



《タイルとホコラとツーリズム season 3 | 白川道中膝栗毛》(2016)
Photo：表 恒匡



《タイルとホコラとツーリズム season 2 | こちら地蔵本準備室》(2015)
Photo：表 恒匡

■ キムスージャ Kimsooja

1957 年大邱（テグ）生まれ。ニューヨーク、パリ、ソウルを拠点に活動を行う。音や光、その文化特有の素材を用いながら、パフォーマンスや映像、写真、インスタレーション等多様なメディアで、様々な文化が複雑に重なり合い共存する社会を表現している。これまでも朝鮮半島の伝統的な布や裁縫をテーマにしてきたが、近年は、この針と鏡というコンセプトを進化させ、私たちの存在、世界、そしてこの時代に直面している大きな課題に疑問を投げかける。第 5 回イスタンブール・ビエンナーレ（1997 年）を皮切りにヴェネツィア・ビエンナーレ（1999 ～ 2007 年）、横浜トリエンナーレ 2005、釜山ビエンナーレ（2002 年、2014 年）など積極的に国際展へ参加するほか、近年の個展として「MMCA Hyundai Motors Series 2016: KIMSOOJA - Archive of Mind」（国立現代美術館、ソウル、2016 年）、「To Breathe」（ポンピドゥー・センター・メス、フランス、2016 年）など多数。



Photo : Bryan Thatcher, Courtesy of More Art and Kimsooja Studio



《Deductive Object》（2016 年）Photo: Aaron Wax Courtesy of MMCA and Hyundai Motor Co. and Kimsooja Studio



《Thread Routes – Chapter I》（2010）Courtesy of Kimsooja Studio



《Archive of Mind》（2016）
Courtesy of MMCA and Hyundai Motor Co. and Kimsooja Studio

■ チェ・ジョンファ Choi Jeonghwa

1961 年ソウル生まれ、同在住。現代アーティストでありながら、アート・ディレクションやインテリアデザインも手がけ、多様な分野で国際的に活躍する。街中や人々の生活など日常の中にあるイメージや素材を用いながら、見る者に新たな視点を気づかせる、ユーモラスで色鮮やかな大規模作品を制作する。国内外の数多くの国際展に出展しており、リヨン・ビエンナーレ（2003 年）のために制作された花樹は期間終了後も展示され、街のシンボルとなるなど、その作品は多くの人々に親しまれる友好的なものが多い。近年に参加した主な芸術祭に、ホノルル・ビエンナーレ（2017 年）、さいたまトリエンナーレ（2016 年）がある。



©Tae Kyun Wang



《Breathing Flower》(2017)



《Gather Together》(2017)



《Sea lives》(2016)

■ オ・インファン Oh Inhwan

1965 年ソウル生まれ、在住。社会的問題や文化的課題への関心から、特定の空間と時間の文脈を利用した実験的で概念的な作品制作や参加型プロジェクトを実施。また、自らの経験を元にしながら、家父長制社会の中にある個人のアイデンティティと属するグループとの関係性や、そこから形成された文化コードを翻訳し、解体するというプロセスを重視した作品制作に取り組む。近年の主な個展に「Looking out for blind spots」(Space willing N dealing、Gallery factory、ソウル、2014 年)、グループ展に「A Room of His Own: Masculinities in Korea and the Middle East」(ソンジュアートセンター、ソウル、2014 年)、あいちトリエンナーレ 2010 など。また、京都芸術センター × 京都市立芸術大学アーティスト・イン・レジデンスプログラム 2011 に参加し京都で滞在制作を行った。Korea Artist Prize 2015 受賞。



《Where a Man Meets Man in Nagoya》(2010)



《Where a Man Meets Man in Nagoya》(2010)



《Name Project: looking for You in Seoul》- パフォーマンス記録 (2009)

■ ハム・キョンア Ham Kyungah

1966 年ソウル生まれ、同在住。1989 年にソウル大学を卒業後渡米し、1992 年にプラット・インスティテュート、1995 年にスクール・オブ・ビジュアル・アーツをそれぞれ修了。アートバーゼル香港 2016 のエンカウンター部門に展示された代表的作品である刺繍作品《不可視を見つめる／5つの都市のためのシャンデリア（2014～2016 年）》は、一見すると写真のように美しい作品であるが、綿密な計画のもとで北朝鮮の職人によって作られたものである。美しい作品の多くは制作背景に注目すると全く別の側面が立ちあらわれる。国内外で精力的に展示活動を行っており、近年の主な展覧会に、台北ビエンナーレ（2016 年）、「Séoul vite, vite!」（Lille 3000、リール、フランス、2015 年）、横浜トリエンナーレ 2001 など多数。Korea Artists Prize 2016 ファイナリスト。



Photo: Keith Park



《What you see is the unseen/ Chandeliers for Five Cities BC 02-0(L), 02-02(R)》(2014-2015)
Collection: Leeum, Samsung Museum of Art(L) Photo: Keith Park



《UnCamouflage Series 01,02, 03, 04, 05》(2016) Courtesy of the artist
Photo: Caska



《Soccer Painting by the Soccer Ball Bouncing Over Crocodile River》(2016)
Courtesy of the artist Photo: Caska (down)

■ ミックスライス mixrice

チョ・ジウン（Cho Jieun、1975 年生まれ、ソウル在住）とヤン・ Cholmo（Yang Chulmo、1977 年生まれ、ソウル在住）によるアートユニット。「移住」によって引き起こされる状況の痕跡やプロセス、経路、記憶を探求し、写真や映像、マンガ等様々なメディアを用いて制作を行う。人や動植物が移動することで起きる事象、外国人移住労働者やそのコミュニティとの協働で見えてくる物事をフラットな視点で読み解く。過去に行われたプロジェクトに移住労働者を受講対象者とした「Mixrice Summer Workshop-Video Class」（Buchon Migrant Workers House、プチョン、2002 年）、主な展覧会に、「Made in Seoul」（メマック市立現代アートセンター、フランス、2016 年）、シャルジャ・ビエンナーレ 2015、アジア・パシフィック・トリエンナーレ（2012 年）、光州ビエンナーレ（2006 年）など。Korea Artist Prize 2016 受賞。



《Plants that Evolve (in some way or other)》(2013)



左右ともに 《21st Century Light of the Factory》(2016)

■ ヒョンギョン Hyon Gyon

1979 年ソウル生まれ、ニューヨーク在住。Mokwon 大学(韓国)で西洋画を学んだ後、京都へ留学生として来日。2011 年京都市立芸術大学大学院博士課程修了。2014 年に京都からニューヨークに拠点を移して以降、精力的な活動を続けている。絵画を中心にインスタレーションや映像、パフォーマンスを手がけ、シャーマニズムから着想を得て描かれる呪術性を感じさせる絵画表現は、画面にエネルギーが渦巻くような力強さを持つ。近年の主な展覧会に「Art for Art's Sake」(カーネギー美術館、カリフォルニア、2016 年)、「Emotional Drought」(Shin Gallery、ニューヨーク、2016 年)、「Hyon Gyon and the Factory」(Chashama、ニューヨーク、2015 年)、「Phantom of Asia」(サンフランシスコアジア美術館、2012 年)など。2012 年度京都市芸術文化特別奨励者。2013 年度京都市芸術新人賞受賞。



Photo: Sarah malmude



《私は壊れていた》(2015) Courtesy of Shin Gallery



《悪の花 No3》(2016) Courtesy of Shin Gallery



《セルフポートレート》(2016) Courtesy of Shin Gallery

■ ツァイ・グオチャン（蔡國強） Cai Guo-Qiang

1957 年中国福建省泉州市生まれ、ニューヨーク在住。1985 年まで上海戯劇学院で学んだ後、1986 年末から 1995 年まで日本に滞在、筑波大学で学ぶ。主な受賞歴に、ヴェネツィア・ビエンナーレ（1999 年）国際金獅子賞、ヒロシマ賞（2007 年）、高松宮殿下記念世界文化賞（2012 年）、国際交流基金賞（2016 年）。東洋哲学や社会問題などから着想を得て制作を行い、火薬や花火を用いた壮大なインスタレーションで知られる。2008 年の北京オリンピックでは視覚・特殊効果のディレクターを務め、開会式・閉会式に花火の演出で注目を集めた。同年にはニューヨークで回顧展「I Want to Believe」（グッゲンハイム美術館）を開催。2011 年の東日本大震災後には「いわき万本桜プロジェクト」を立ち上げ、社会的支援も行っている。近年の主な個展に「My Stories of Painting」（ボンネファンテン美術館、マーストリヒト、オランダ、2016 年）、「帰去来」（横浜美術館、2015 年）、「九級浪」（上海当代芸術博物館、2014 年）、「農民ダ・ヴィンチ」（ブラジリア、サンパウロ、リオデジャネイロ巡回、2013 年）など。2015 年 6 月 15 日には最新の火薬プロジェクト「スカイ・ラダー」を成功させ、2016 年より Netflix にてドキュメンタリー「Sky Ladder: The Art of Cai Guo-Qiang」を配信。



Photo: Javier Molina
Courtesy of Museo Nacional del Prado



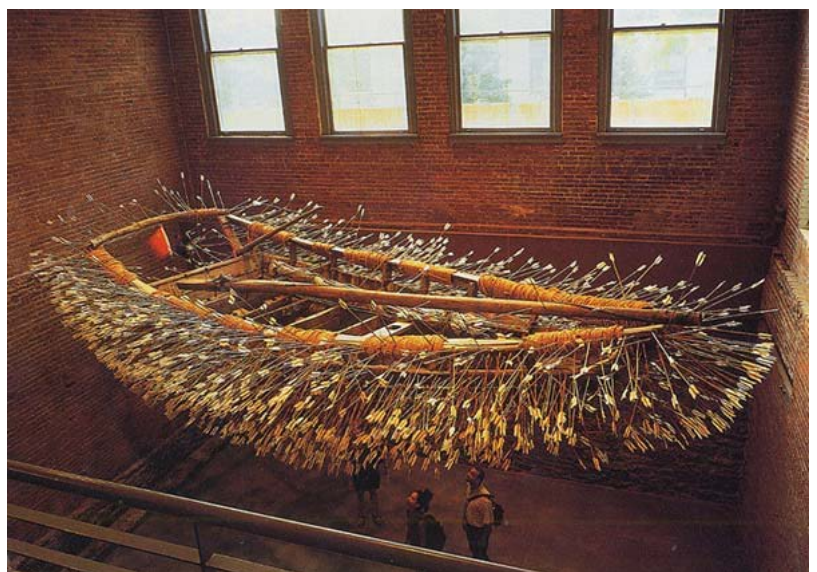
《Sky Ladder》（2015）
Photo: Wen-You Cai, Courtesy of Cai Studio



《Footprints of History: Fireworks Project for the Opening Ceremony of the 2008 Beijing Olympic Games》（2008）Commissioned by The International Olympic Committee and The Beijing Organizing Committee for the Games of the XXIX Olympiad [Ephemeral]
Photo: Hiro Ihara, Courtesy of Cai Studio



《Head On》（2006）Commissioned by Deutsche Bank AG
Deutsche Bank Collection
Installation view at Yokohama Museum of Art, 2015.
Photo: Kamiyama Yosuke



《Borrowing Your Enemy's Arrows》（1998）
The Museum of Modern Art, New York, Gift of Patricia Phelps de Cisneros in honor Installation
view at P.S.1. Contemporary Art Center, New York, 1998.
Photo: Hiro Ihara, Courtesy of Cai Studio

■ ヤン・フードン（楊福東） Yang Fudong

1971 年北京生まれ、上海在住。1995 年杭州・中国美術学院卒業。中国の伝統を重んじながらも新しさを感じさせる映像美は、劇的な存在体験をもたらす。近年ではそれらの映像を用いたインスタレーションも多数発表。複数の視点を意識し、神話や個人の記憶、生きた経験を通してアイデンティティの構造と形成を追及している。横浜トリエンナーレ 2001 やドクメンタ（2002 年）、ヴェネツィア・ビエンナーレ（2007 年）、シドニー・ビエンナーレ（2010 年）に出品するなど国際的にも高く評価される。近年の主な個展に、「Moving Mountains」（Shanghai Center of Photography、2016 年）、「Yang Fudong, The Light That I Feel」（大邱美術館、2016 年）。主なグループ展に「What About the Art? Contemporary Art from China」（QM Gallery Al Riwaq, Qatar Museums、ドーハ、2016 年）、「Bentu: Chinese Artists In A Time of Turbulence and Transformation」（Fondation Louis Vuitton, パリ、2016 年）他多数。



《An estranged paradise》(2002) ビデオ



《Look Again Nr. 3》(2004) カラー C プリント



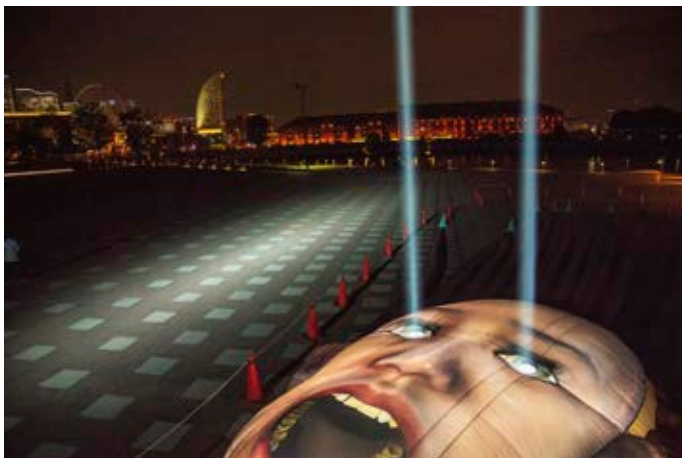
《Manifold Little Hills (Xiaochongshan)》(2006) シングルチャンネルフィルム

■ ルー・ヤン（陸揚） Lu Yang

1984 年上海生まれ、在住。2010 年中国美术学院修了。実写映像、アニメーション、デジタルペインティング、インスタレーション、音楽等を自由に組み合わせ、科学から宗教、心理学、医学、ゲーム、ポップカルチャーといった幅広い分野から着想を得た映像作品を制作する。混沌とし、愚かしくも見える作風の映像は、一般常識に疑問を投げかけるアイロニーを特徴としている。近年の主な個展に「ポート・ジャーニー・プロジェクト 横浜⇄上海 ルー・ヤン展」（象の鼻テラス、神奈川、2016 年）、「LU YANG Screening Program」（アーツ千代田 3331、東京、2013 年）。グループ展にヴェネツィア・ビエンナーレ（2015 年）、福岡アジア美術トリエンナーレ（2014 年）、「A Shaded View on Fashion Film」（ポンピドゥーセンター、パリ、2013 年）がある。



《Gong Tau Kite》(2016)



《Power of will - final shooting》(2016)



《Delusional crime and punishment》(2016)

■ヘ・シャンユ（何翔宇） He Xiangyu

1986 年丹東（中国）生まれ、北京、ベルリン拠点。物質形態の変化や知覚、味覚等を題材とする政治色の薄い作品は新しい世代の中国コンセプチュアル・アートであり、近年では映画製作などのプロジェクト等も行う。代表作の「コカ・コーラプロジェクト」では、127 トンのコカ・コーラを煮詰めその残留物を展示し、また「タンクプロジェクト」では、高級ブランドの皮製品に使用される高価なレザーで原寸大の戦車を制作した。現在も続けている「Palate Project」では個人の経験に焦点を当て、知覚を概念的に探る、より抽象的な作品を制作している。2014 年にはホワイト・キューブ（ロンドン）での個展を成功させ、2016 年には SCAI THE BATHHOUSE（東京）とカイカイキキギャラリー（東京）にて個展を同時開催。また「Tales of Our Time Film Program」での映画作品『The Swim』上映（ソロモン・R・グッゲンハイム美術館、ニューヨーク、2017 年）、「Juxtapoz x Superflat」（バンクーバー美術館、2016 年）、「Chinese Whispers」、（パウル・クレア・センター、ベルン美術館、スイス、2016 年）リヨン・ピエンナーレ（2015 年）など世界各地のグループ展にも数多く参加している。Future Generation Art Prize 2014 ファイナリスト。



「コカ・コーラプロジェクト」



「タンクプロジェクト」



《200g Gold, 62g Protein》(2012)



《My Fantasy》(2012)

■ タオ・フイ（陶輝） Tao Hui

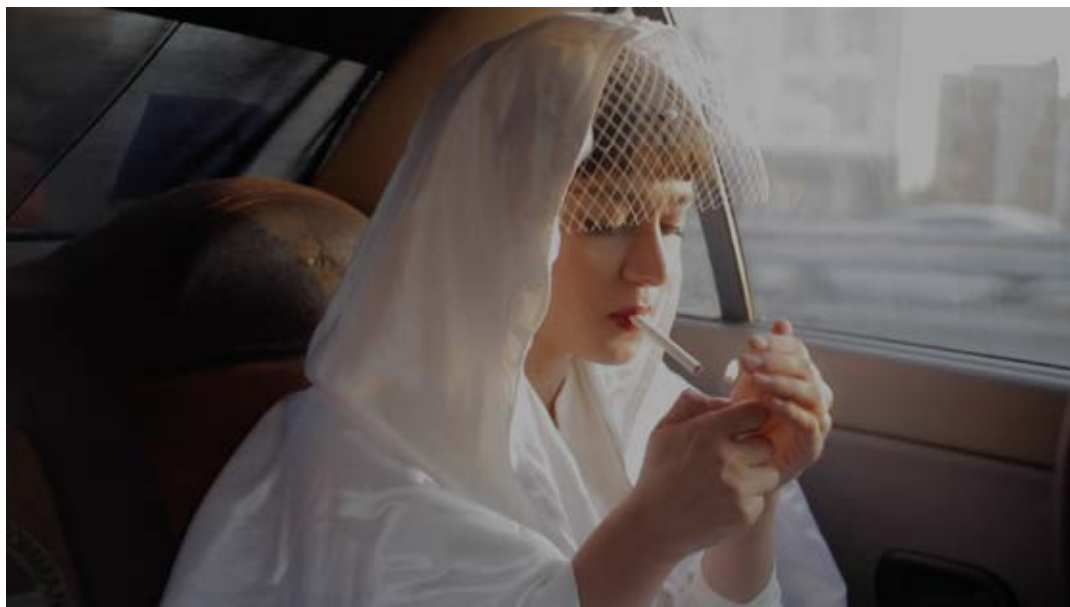
1987 年雲陽県（中国）生まれ、北京在住。2010 年四川美術学院修了。山村で生まれ育ったタオは都市と農村の共存を重要なテーマとして掲げ、グラフィックアート、絵画、インスタレーションなど幅広い表現方法と伝統文化や伝統技術を巧みに使いながら、急速に国際化・近代化する現代社会に対して批評的な作品を発表している。近年行われた主な個展に「Now & Then」（Galerie Untilthen、パリ、2016 年）、「New Directions: Tao Hui」（UCCA、北京、2015 年）、主なグループ展に「The Collection, A selection of Chinese works」（Fondation Louis Vuitton、パリ、2016 年）、「Essential Matters – Moving Images from China」（Borusan Contemporary、イスタンブール、2015 年）、「18th Contemporary Art Festival Sesc_Videobrasil」（サンパウロ、2013 年）など。アーティスト・イン・レジデンスプログラム 2017：京都芸術センター × A4 ART MUSEUM（中国・成都）参加アーティスト。



Photo: Zhou Siwei



《Materials NO.4》（2015）Courtesy AIKE-DELLARCO



《The Dusk Of Teheran》（2014）